

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：21402

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03433

研究課題名(和文) JSL対話型アセスメントDLAの精緻化と外国人児童生徒のための教育的枠組みの構築

研究課題名(英文) Development of an Educational Framework based on the Dialogic Language Assessment for Young Learners of Japanese as a Second Language

研究代表者

伊東 祐郎 (Ito, Sukero)

国際教養大学・専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科・教授

研究者番号：50242227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,490,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文部科学省が2014年に開発した『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA(Dialogic Language Assessment)』の言語能力記述文を年齢(枠)および言語能力レベル別に作成した。これは、外国人児童生徒が日本の学校教育における学習活動の中で、言語を使用して「なにができるか」を、年齢に応じた発達と言語能力のレベルに基づき記述したものである。また、この記述文を活用した教育実践を複数の研究協力校で実施し、DLA実践者(評価と指導)の養成研修を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得られた知見により、外国人児童生徒の言語能力を、年齢に応じた発達段階を踏まえた上でより実態に即した形で把握できることが期待される。すなわち、学校教育現場の教員や支援者が、外国人児童生徒の個別の状況に応じた支援を行う上でのガイドラインとなりうる。外国人児童生徒への教育・支援のあり方が益々重要な課題となる中、その指針を示すことは、学術的のみならず社会的にも意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we developed age- and level- specific Can-Do Descriptors of the Dialogic Language Assessment (DLA) for Young Learners of Japanese as a Second Language developed by MEXT in 2014. The DLA Can-Do descriptors provide examples of what young learners can do during their learning activities in school education at various stages of language- and age- development. In addition, educational practices using the DLA Can-Do descriptors were implemented in several research partner schools, and training for DLA practitioners was conducted.

研究分野：日本語教育 第二言語習得 テスティング

キーワード：年少者日本語教育 バイリンガリズム 言語習得 評価 対話 DLA 外国人児童生徒

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本科学研究チームのメンバーが文部科学省からの事業委託（平成 22-24 年度）を受け、「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA(Dialogic Language Assessment)」(以下、DLA) を 2014 年に開発して以降、全国の学校教育現場では DLA の普及が進んでいる。同年の文部科学省の省令改正に伴う「特別の教育課程」の設置により、外国人児童生徒への日本語指導が制度化されたこともあり、DLA への関心は急速な高まりをみせている。

(2) DLA は、外国人児童生徒の四技能を一对一の対話形式で測定する対話型アセスメントである。測定結果を学習参加と支援必要度との関係から段階付けした「JSL 評価参照枠」の 6 ステージに照らし合わせて評価する。実施過程で評価者が教育的介入を行うことにより、子どもの将来の学習可能性も評価できるといった「発達の最近接領域(ZPD)」の理論（ヴィゴツキー、柴田 訳, 1962）にもとづくダイナミック・アセスメントとも位置付けられる。

(3) 一方で、DLA が評価の目安として設けた「JSL 評価参照枠」は、汎用性を目指したために全年齢共通の記述文となっている。そのため、年齢ごとの言語発達のめやすが示されておらず、評価の視点共有が難しい。これには、そもそも、外国人児童生徒の言語能力の実態調査が圧倒的に不足しており、その全体像を俯瞰的に捉えることができていないという分野全体の課題も影響している。また、DLA は対話型であるために、その実施において一定程度の専門性が必要とされ、加えて、その評価結果を指導に結びつけるための道筋も十分に示されていない。

## 2. 研究の目的

本研究ではこうした背景をふまえ、DLA の改善とさらなる発展を目指し、以下の 3 つを目的として掲げた。

- (1) DLA を用いた外国人児童生徒の言語能力の実態把握
- (2) 実態調査に基づく JSL 評価参照枠の年齢別言語能力記述文の作成
- (3) JSL 評価参照枠のステージに沿った指導方法の提案と教育現場への還元

## 3. 研究の方法

(1) 外国人児童生徒の言語能力の実態把握については、DLA による言語能力の横断・縦断調査を実施し、入国年齢と滞日期間、母語力、そして学校の在籍クラスでの学習活動への参加状況との関係の中で、日本語能力の特徴を明らかにし、全体的傾向を把握する。

(2) JSL 評価参照枠の年齢別言語能力記述文の作成では、年齢による発達の違いと習得段階による特徴を明らかにするために、年齢（枠）・ステージごとの言語的特徴を技能別、観点別に質的に抽出し、記述する。

(3) 研究協力校における教育実践を通して、ステージまたは年齢（枠）別に効果的な指導・支援方法を提案するとともに、以上の結果を踏まえた DLA 実践者（評価者と指導者）養成研修を行う。

## 4. 研究成果

(1) 四技能のうち「話す」、「聴く」、「読む」の実態把握に関しては、「話す」145 データ（表 1）、「聴く」95 データ（表 2）、「読む」319 データ（表 3）を収集し、分析を進め、年齢（枠）別の言語能力記述文の試案を作成した。「書く」については、日本語母語話者児童 162 名の作文データを分析し、年齢別の作文使用語彙の質的特徴を明らかにした。ただし、新型コロナウイルス感染症拡大による調査活動の制限も影響し、DLA で対象としている学校教育で扱われる作文のジャンル（日記文、紹介・報告文、意見文、批評文）ごとの外国人児童生徒の作文データが十分に揃わなかったため、言語能力記述文の作成は今後の課題とした。

表1：「話す」のデータ分布

話	小1	小2	小3	小4	小5	小6	計
S6	0	0	0	0	3	2	5
S5	6	3	7	0	12	8	36
S4	22	4	16	2	13	4	61
S3	13	2	4	2	0	3	24
S2	6	1	3	5	1	0	16
S1	1	0	0	2	0	0	3
計	48	10	30	11	29	17	145

表2：「聴く」のデータ分布

聴	小1	小2	小3	小4	小5	小6	計
S6	1	0	0	3	0	2	6
S5	3	1	3	4	3	2	16
S4	4	5	8	6	5	4	32
S3	9	8	5	1	5	6	34
S2	1	0	0	0	2	2	5
S1	1	0	0	0	1	0	2
計	19	14	16	14	16	16	95

表3：「読む」のデータ分布

読	小1	小2	小3,4	小5,6	中学	計
S6	1	0	6	5	6	18
S5	2	3	13	11	4	33
S4	32	13	29	20	6	100
S3	26	16	55	38	5	140
S2	7	3	5	3	3	21
S1	3	3	1	0	0	7
計	71	38	109	77	24	319

表1、表2、表3に示したDLAデータを文字化し、「話す」は1)話の内容・まとめ、2)文・段落の質、3)文法的正確度、4)語彙、5)発音・流暢度、6)話す態度、「聴く」は1)聴解力、2)語彙、3)聴解行動、「読む」は1)読解力、2)音読行動、3)読書行動、4)語彙・漢字、5)読書習慣・興味・態度の観点から量的・質的分析を行った上で、年齢(年)×6ステージの特徴を探索的に記述した。紙幅の都合により、例として「読む」の小学2年生のステージ3の言語能力記述文のみを提示する(資料1)。

資料1：DLA読むの小学2年生ステージ3の言語能力記述文(案)

読解力	興味のある短くとても簡単なまとまりのある本や文章(ストーリー展開のある絵本やごく短い物語や、身の回りのテーマのごく短い説明文(写真の多い本)などを読んで、 □大事な内容をおおまかに理解し、話すことができる □好きな場面について、簡単な感想を話すことができる
音読行動	□文節で区切りながら、ゆっくりでも安定した速さで音読できる (一分間に120~130拍程度が目安)
読書行動	□挿絵から話の流れを推測することができる
語彙・漢字	□文章中に出てくる小学1年生レベルの漢字がいくつか読める □日常的な語彙(例：小学1年生上の教科書レベルの語彙)の意味をだいたい理解できる
読書習慣・興味・態度	□興味のある短くとても簡単なまとまりのある本や文章(ストーリー展開のある絵本やごく短い物語や、身の回りのテーマのごく短い説明文(写真の多い本)などを進んで手に取って、読む習慣がある □読んでもらうための本を、楽しみながら選ぶことができる

「読む」の研究成果は研究業績に挙げた櫻井(2018)、「話す」の結果の基礎調査の部分は真嶋他(2019)の著書で公開した。記述文作成に至る観点別の量的・分析の結果についてはこれらを参照されたい。「話す」(真嶋・伊澤担当)と「聴く」(小林担当)の言語能力記述文(試案)の全容については2021年度に公開予定である。

(2) 複数の研究協力校(広島、兵庫、大阪、愛知、神奈川)において、この言語能力記述文(試案)を活用してステージ判定を行った後、日本語の習得状況に合わせた教育実践を実施した。具体的には、日本語力のステージ1から2前半のテーマ・トピック別カリキュラム、ステージ2後半からステージ3のJSLカリキュラムの授業、ステージ4以上の在籍学級でのユニバーサルデザイン授業である。また、ステージ3から4の児童生徒にはDLA<読む>を活用した二言語での読書力育成プログラムを導入、母語のステージが4以上の生徒には母語での先行学習の実践を行った。これら実践に関しては、研究業績に記載の論文・発表等で報告した。

(3) DLA実践者(評価者と指導者)養成研修については、全国の学校教育現場や教育委員会からの要請に応えつつ、各年30~40回程度継続して行っている。こうしたDLAの普及に伴い、母語でのDLA実施の要望も増加傾向にあるため、最終年度はベトナム語、ロシア語、フィリピン語のDLAの翻訳とこれらの言語のDLA実施者の養成も行った。

(4) 今回、試案として作成した「話す」「聴く」「読む」の言語能力記述文の妥当性検証と「書く」の記述文の作成、そして、外国人児童生徒の母語の言語能力記述文の作成については、本研究の発展的研究課題として取り組む「基盤研究(B)21H00538」により実施予定である。

<引用文献>

- ① ヴィゴツキー, L. (1962/2001) 柴田義松(訳)『新訳版思考と言語』新読書社
- ② 文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 伊東祐郎	4. 巻 67
2. 論文標題 テストで言語能力は測定できるのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言文』	6. 最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林幸江	4. 巻 11
2. 論文標題 外国にルーツをもつ子どもの日本語教の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ことばと文字』	6. 最初と最後の頁 108-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真嶋潤子	4. 巻 Vol. 21, No.1
2. 論文標題 「母語喪失」と子どものアイデンティティ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『チャイルドヘルス』	6. 最初と最後の頁 pp.50-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊東祐郎	4. 巻 第11号
2. 論文標題 テスト開発と日本語教師の評価リテラシー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日語教育と日本学』華東理工大学出版社	6. 最初と最後の頁 pp.11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真嶋潤子	4. 巻 5号
2. 論文標題 日本語を母語としない年少者への言語教育を考える	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『ことばと文字』	6. 最初と最後の頁 104-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 櫻井千穂	4. 巻 26号
2. 論文標題 スヘイン語母語児童生徒の二言語能力の相関分析 - 物語文の聴解・再生課題を通して -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『日本語・日本文化研究』大阪大学大学院言語文化研究科	6. 最初と最後の頁 42-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊東祐郎	4. 巻 第19号
2. 論文標題 古典的テスト理論	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『日本言語テスト学会誌20周年記念特別号』	6. 最初と最後の頁 192-195,
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井恵理子	4. 巻 0
2. 論文標題 子どもにとって『意味のある活動』をつくる	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『希望のとびら 平成28年度日本語教室実践報告「外国人児童生徒等とともに」』	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Goto Butler and Chiho Sakurai	4. 巻 17,5
2. 論文標題 Developing a Classroom-based Language Assessment of Japanese for Children Who Speak Minority Languages in Japan: The Dialogic Language Assessment	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 LANGUAGE ASSESSMENT QUARTERLY	6. 最初と最後の頁 467-490
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/15434303.2020.1826487	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計29件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 菅長理恵・松田真希子
2. 発表標題 課題作文「学校紹介」の学年別使用語彙の分析 DLA「書く」JSL評価参照枠精緻化のためにー
3. 学会等名 2019年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅長理恵
2. 発表標題 伸ばすために測るーDLAの理念
3. 学会等名 2019年度比較教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井千穂, 平吹洋子
2. 発表標題 南米につながる子どもたちが通う公立中学校の挑戦 - ことばとアイデンティティの醸成を目指して -
3. 学会等名 EJHIB2019 (ブラジル、サンパウロ) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井千穂・真嶋潤子・中島和子・野口裕之
2. 発表標題 DLA<読む>の構成概念妥当性の検証 テキストレベルの順位性をめぐって
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻井千穂
2. 発表標題 文化言語の多様な児童のための多読プロジェクトの実践
3. 学会等名 2018年日本語教育国際研究大会（ヴェネツィア、Ca' Foscari University of Venice）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅長理恵、高橋登、真嶋潤子、櫻井千穂、小山幾子
2. 発表標題 DLAのダイナミック・アセスメントとしての可能性 - アセスを通じて教師力を伸ばす -
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 真嶋潤子
2. 発表標題 日本語教育における「評価」 - 何のために何をもって「評価」するのか -
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会CAJLE 2019年次大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻井千穂・鎌田圭甫・権藤桂子・塘利枝子・田中裕美子
2. 発表標題 DLAによる発達に関する見立て - あるブラジル系児童のケースを通して
3. 学会等名 2018年度バイリンガル・マルチリンガル子どもネット研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 篠原啓史・松本友美・平吹洋子・櫻井千穂
2. 発表標題 DLA<読む>短縮版を活用した生徒の現状把握と支援体制の構築 外国人生徒の教科学習言語能力の向上を目指して
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第3回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 真嶋潤子, 櫻井千穂
2. 発表標題 A Study of the Development of the Speaking Ability in Two Languages of the Culturally Linguistically Diverse Children in Japan (日本で多言語環境に育つ年少者の話す力の二言語調査)
3. 学会等名 EAJS2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 真嶋潤子
2. 発表標題 日本語母語児童とCLD児童の「話す力」の調査
3. 学会等名 2017年度DLA科研公開研究会 「JSL評価参照枠の精緻化にむけて」
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 櫻井千穂
2. 発表標題 支援につながる言語能力アセスメント - 外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLAの可能性と課題 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻井千穂
2. 発表標題 日本語母語児童の読書力横断調査（中間報告）
3. 学会等名 2017年度DLA科研公開研究会「JSL評価参照枠の精緻化にむけて」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅長理恵
2. 発表標題 DLA<書く>に基づく集団作文力調査結果（中間報告）
3. 学会等名 2017年度DLA科研公開研究会「JSL評価参照枠の精緻化にむけて」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林幸江・斎藤智慶
2. 発表標題 CLD児の日本語の教室談話の実態 - DLA 聴く の事例を基に -
3. 学会等名 MHB研究会2017年度研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林幸江
2. 発表標題 CLD児の聴く力の発達の記述 - 「JSL評価参照枠 聴く 」の年齢別ステージ3、4の記述を目指して -
3. 学会等名 2017年度DLA科研公開研究会 「JSL評価参照枠の精緻化にむけて」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林幸江・菅長理恵
2. 発表標題 外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLAとは - 入門編 -
3. 学会等名 2017年度バイリンガル・マルチリンガル(BM)子どもネット研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井恵理子/加納千恵子・濱川祐紀代・谷部弘子
2. 発表標題 非漢字圏学習者の<漢字力>の養成を目指して 学習者の日本語レベルや属性に応じて 」(パネル発表)
3. 学会等名 パリ2016日本語教育国際研究大会(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石井恵理子・秋山幸
2. 発表標題 カナダで育つ日本語背景の幼児の親が抱える課題解決に向けたネットワーキング(ポスター発表)
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会 第2回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 真嶋潤子
2. 発表標題 日本語能力を踏まえた「取り出し」による日本語指導について-子どもの成長全体を取り巻く大人の協働-
3. 学会等名 平成28年度日本語指導支援員等研修会・兵庫県教育委員会事務局人権教育課
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 真嶋潤子
2. 発表標題 外国につながる児童生徒の心の安定と教育
3. 学会等名 平成28年度 教育サポーター育成研修・大阪府教育委員会事務局教育振興室
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石井恵理子
2. 発表標題 BM 幼児家庭への子育て支援 - 国内の地域における取り組み
3. 学会等名 バイリンガル・マルチリンガル(BM)子どもネット第1回学習会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小林幸江、伊澤明香
2. 発表標題 文化的言語的に多様な子どもの話す力・聴く力ーJSL評価参照枠「話す」「聴く」の年齢枠別記述文案作成ー
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 櫻井千穂、菅長理恵
2. 発表標題 対話型アセスメントDLA実践ワークショップ
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 櫻井千穂、李在鉉、岡崎渉、永田良太
2. 発表標題 JSL児童に対する効果的な授業方法の検討 授業力があるとされる教師によるJSLカリキュラムの授業談話分析を通して
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 真嶋潤子編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 330
3. 書名 『母語をなくさない日本語教育は可能か - 定住二世児の二言語能力』	

1. 著者名 櫻井千穂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 342
3. 書名 『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	真嶋 潤子 (Majima Junko) (30273733)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授  (14401)	
研究分担者	小林 幸江 (Kobayashi Yukie) (40114798)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授  (12603)	
研究分担者	櫻井 千穂 (Sakurai Chiho) (40723250)	広島大学・教育学研究科・准教授  (15401)	
研究分担者	菅長 理恵 (Suganaga Rie) (50302899)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授  (12603)	
研究分担者	石井 恵理子 (Ishii Eriko) (90212810)	東京女子大学・現代教養学部・教授  (32652)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中島 和子 (Nakajima Kazuko)		
連携研究者	伊澤 明香 (Izawa Sayaka) (70846899)	大阪経済法科大学・教養部・助教  (34427)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------